

4章 総合問題4

問題

【1】

解答

- (1) 「全訳」の下線部①を参照。
- (2) I joined him rather hesitantly
 別解 Rather hesitantly I came towards him to talk
- (3) それに、イギリスのどこへ行ってもこの上で見られる眺めほど素晴らしい眺めはありませんよ。
- (4) 旅の途中で数多くの素晴らしい景色を見たいと思っているのに、ここで一番よい景色を見ることは、時期尚早だと思ったから。(57字)
 別解 素晴らしい眺めを見ることを始めたばかりなのに、ここで一番よい眺めを見ることは、早過ぎると思ったから。(50字)
- (5) c
- (6) If a couple more years pass, it might be too late for you to take a walk up there
- (7) 「全訳」の下線部①を参照。
- (8) ① out ② for ③ to

解説

- (1) Sitting … はCとなる現在分詞。S = a thin, white-haired manである。いわゆるC + V + S型の倒置形である。
smoking his pipe は現在分詞から成る句で、2つの動作が同時に行われていることを示す。sit …ing「座って…する」の形。
Sitting … stone that marked ~ was a thin, white-haired man in ~
 C 関係詞節 V S
- (2) この文は二重否定表現。「(それに) 従わない何の理由もわからない」《直訳》の意味。二重否定表現はただ単に肯定の意味になるだけではなく、「控えめさ」「ためらいの気持ち」を表す。ここではその男が、自分の下に来て話をするを誘っているのは、1つ前の文の I could see him gesturing for me to join him からわかるはず。以上から「私はためらいがちに彼の下へ話をしに行った。」ぐらいの意味の文にすればよい。「ためらいがちに」は hesitantly などの副詞で表す。
- (3) 比較級の文の than 以下がない比較対象語句の省略構文であることに気付く。比較対象語句の省略は直前にその語句が既述されているのが原則だから、直前を見る。補う語句は than from the nice little spot。したがって、文全体は And you won't get a better view (than from the nice little spot) anywhere (else) in the whole of England となり、最上級に匹敵する文。

- (4) 下線部⑤の直後の2文が最大のヒント。

その2つめの文は To see the best before I have properly begun が不定詞の名詞用法で主部。before 以下は see にかかる。would は仮定法過去を表す助動詞。条件は主部に含まれる。

To see the best would be somewhat premature

S <条件> V C
 ↑
 before I have properly begun

その2文から

○この主人公が観光のためにドライブ旅行を開始したばかりであること。

○その初めの段階で最高のものを見ることは時期尚早であること。

を読み取ってまとめる。

- (5) この could を含む節は文脈から現在の内容を表している文だと読み取る。

現在の内容を表す文の中での過去形の助動詞だから仮定法ではないかとまず考える。

次に条件を表す部分を探すことになるが、この文は条件が明示されず暗に「やろうと思えば；しようとするなら」の条件が前提となっている場合の文である。「私に言わせてもらえば、あなたがやろうと思えば上まで行けるでしょう。」という意味の文である。I'd say = I would say. この would は仮定法過去の would だが say, think, suggest, recommend などの動詞の前に置かれて「私でしたら、～と申し上げる；考える；提案させていただく；推薦させていただく」の意味を表す一種の謙譲表現。

※各選択肢の訳と could の説明は以下の通り。

a アンドリューは2歳の時幾つかの文字を書くことができた。[過去的能力]

b 「あれは冗談になっていない。」と彼は怒って言った。「ひょっとしたら冗談かもよ。」と私は気のない返事をした。

[20～30%ぐらいの低い話し手の確信度を表す] (it could be = possibly)

c (やろうと思えば) 今歩いて川を渡れる。[条件が明示的ではない場合の仮定法過去の could]

d その会議は(ひょっとしたら)莫大な悪影響を及ぼすだろう。

[20～30%ぐらいの低い話し手の確信度を表す]

e 核兵器は平和のための一種の代償であったという議論は可能かと思われる。

[婉曲の could. It can [could] be argued that ～. 結論を述べる際に用いる表現]

- (6) <名詞句 and S + V>の形で先行する名詞句が条件を表す形。意味は、「もう2年も経てば(ひょっとしたら)手遅れになってしまうかもしれない」となる。<名詞句>の意味を if 節で書き換えればよい。

省略されている部分は以下のように考える。and 以下は it で始まっていることから、全体は it ～ to … の形式主語構文だと考えて、to … が省略されていることに気付く。直前の部分が「上の方まで登って行かなければ、後悔するだろう」だから、「あなたが上の方まで登って行くこと」を表す語句を以下に補う。

- (7) この構文全体が it is ～ that … の強調構文であることに気付く。いわゆる焦点となる語句に修飾語句が付いた形。

焦点となっている部分の構造は以下のように考える。

＜焦点＞

(to 不定詞の形容詞用法)

○～ cause ○ to … 「～は○に…させる」

○ make out 「理解する」

○ take O for ~ 「Oを～と思う」

○ refer to ～ 「～にふれる；言及する」

私は車を一瞬止めて、正しい道なのかいわば確認しなければならない気がした。

私は車から出て足腰を少し伸ばすことにした。実際にそうすると、丘の中腹にいるとの印象がますます強くなった。道路の片側は藪や小さな木々が茂る急斜面であり、一方もう片側では葉の間から遠くの田園がかいま見えた。

私はおそらく、もっと眺めのいい場所を求めて、葉の間からのぞきながら道沿いに少し歩いたと思う。その時背後に声がした。言うまでもなく、この時点まで自分しかいないと思っていたため、少し驚いて振り返った。もう少し道を上がったところの反対側には、遊歩道の入り口が見え、それは茂みの中へと急激に登りながら消えていた。④この場所の目印となっている大きな石に、パイプを吹かしながら座っていたのは、布製の帽子をかぶっていた痩せた白髪の男であった。老人は私に再び呼びかけ、私は何と言っているか聞き取れなかったが、こちらへ来いと合図しているのはわかった。一瞬浮浪者かと思ったものの、よく見ると単に新鮮な空気と夏の日差しを楽しんでいる地元の人だとわかり、応じない理由はないと思った。

「どうかと思っていたんですよ。」と、私が近寄ると彼は言った。「旦那の脚はどれほど丈夫かと。」

「えっ？」

老人は遊歩道を指さした。「あそこを上るには1対の頑丈な脚と1対の頑丈な肺が必要でしてね。わたしにはもうどちらもありませんから、ここにいます。だがもしもっと体が丈夫なら上で座ってますよ。上にはいい場所があるんです、ベンチから何からあってね。それに、イギリスのどこへ行ってもこれより素晴らしい眺めはありませんよ。」

「もしおっしゃることが正しいのなら」と、私は言った。「私もここにいた方がよさそうですね。私は、ちょっと車での旅行を始めようとしているのですが、その間に多くの素晴らしい

眺めを見たいと思っているのです。本格的に出発する前に一番いいものを見てしまうのは、時期が早過ぎますから。」

老人は私の言ったことを理解していないようだった。というのも、またもやこう言ったからだ。「イギリス中探したってあれよりいい眺めはないですな。だが言っときますが、1対の頑丈な脚と1対の丈夫な肺が必要ですがね。」そして老人は付け加えた。「お年の割に健康そうですなあ。旦那ならわけなく上まで登れるだろうと思いますよ。なぜって、わしだって調子のいい日には何とか行けるんですから。」

私は遊歩道を見上げた。確かに急で、かなり道も悪いように見えた。

「旦那、言っときますがね、あそこまで登らないと後悔しますよ。それに何が起こるか分からない。もう何年かしたら遅すぎるなんてことにも」——彼はかなり下品な笑い声を立てた——「まだ行けるうちに行った方がいいですよ。」

今になって、老人はユーモアを込めてこの発言をしたつもりだったのかもしれないと思う。つまり、彼はひやかしの発言のつもりであったのだ。だがその朝においては、その発言は不愉快なものであったと言わなければならない。①私に、その遊歩道を上へと登る気を起こさせたのは、ただ、彼の私への冷やかしがいかに的外れであったのかを、身を持って示したいとの気持ちからであったからかもしれない。

いずれにしろ、登っておいて良かったと思う。たしかに、かなり骨の折れる道であった——とはいえ、とくに苦労はさせられなかったと言えるが——道はジグザグに100ヤードほど、丘を登っていった。そのうち私はちょっとした開けた場所に出た。間違いなく老人が言っていた場所であろう。ベンチが人を出迎え——そして確かに、何マイルも先までの周囲の田園風景の、実に素晴らしい眺めに出迎えられたのであった。

注

ℓ. 1 ◇ compel *vt.* 「無理やり…させる」 > compulsory *adj. n.*

◇ take stock 「在庫調べをする；吟味する」

ℓ. 23 ◇ premature *adj.* 「時期尚早の；早過ぎる」

ℓ. 30 ◇ vulgar *adj.* 「下品な」 (⇔ refined, cultured)

ℓ. 34 ◇ offensive *adj.* 「いやな、不快な」

cf. offend *vt., vi.* > offense *n.*

ℓ. 39 ◇ marvel(l)ous *adj.* 「素晴らしい」 < marvel *n., vt., vi.*

【2】

全訳

① アメリカ的思考は65歳定年以降の時期を「黄金の日々」と考えるが、これは世界一周の船旅の日程を考えたり、ゴルフコースに牧場風の住宅を建てたり、子供の家を順に訪ねて感謝の心を持つお行儀のよい孫たちの愛と尊敬の光を浴びることに人生の焦点を合わせたりする時期である。唯一の問題は、年金その他いくつかの違った元から入ってくる細々した収入の管理について株式仲買人と連絡を保つことである。(もちろん現実の事情は、何らかの蓄えの価値が絶えずインフレによって浸食される中で、限られた収入でやりくりするのが毎日の戦いである。おまけに孫たちも昔の孫のようにお行儀がよくはない。) 日本的思考は、

55歳の定年は「第二の人生」の開始を意味することを知っている。⑥退職手当は普通は一括して支払われ、毎月の決まった年金を支払う方式は稀である。その資金を元手にして、55歳の人は、自営の小さなサービス業を始め、また同時に前の会社の子会社の1つに非常勤の顧問として働き続けようとする。⑦それができない場合は昔の学友がやっている小さな同族会社か、在職中にできて温めていた元の仕事の縁故をたどって働き口を求める。あるいは学校・クラブ・社会団体で管理職として働く選択もある。日本人の退職者が持っている有利な点は、65歳より55歳の方が「第二の人生」を始めるのが容易だということである。

【3】

解答

- (1) 「全訳」の下線部①, ④, ⑤, ⑧, ⑨を参照。
- (2) ① d ② b ③ a ④ c
- (3) ① c ② a
- (4) ① It's an entire set of sugars that an organism or a cell makes.
② It's a process in which sugars are added to fats and proteins by an enzyme.
- (5) 3つ [①, ②, ③]
- (6) ① c ② b
- (7) after と which (の間)
- (8) 糖類は近年まで単なる細胞表面の飾りであると考えられていたが、1980年代に入り、糖転移酵素遺伝子の発見により一躍脚光を浴びた。実際にこれらの酵素遺伝子の研究によって、蛋白質上の糖欠損がリウマチや筋ジストロフィーなど様々な疾患に関与することがわかってきた。ヒトゲノム解析により判明したさらに多くの糖転移酵素の研究を通じて、糖機能の全容を解明することが今後の課題である。他方で技術面も革新され、体内の微量の糖類を検出したり、糖を人工的に合成したりする機器が開発された。これにより新しい薬剤やワクチンの開発が期待できる。もっとも、糖類は大きさ、種類とも極めて多数に上るので、すべてを解明できる日は遠い。(299字)

解説

- (1) ①◇ for all ～「①～にもかかわらず ②～に関する限り」
◇ fanfare: フランス語のファンファーレに由来し『派手な宣伝』などの意味を持つ。
◇ the unveiling of genome after genome
○ unveil 「ヴェールをはがす；明らかにする」
◇ genome after genome: 名詞を after でつなぐと「次々と」「何度も」という反復・継続を表す。
e.g. day after day (毎日毎日)
have meeting after meeting (次々に会議を開く)
◇ forgive A for …ing 「(…することに対して) Aを許す；大目に見る」
◇ all there is to life
all と there の間に関係詞が省略されていると解される。
○ all there is to A 「Aに関して存在するすべて」

Ex. That's all there is to it. (ただそれだけのことだ。)

- ④この文の主語は the list で動詞は includes である。

things と they are ~の間に to do の目的語に相当する関係代名詞が省略されていると見ることができる。先行詞は things である。

includes の目的語は regulating ~, directing ~, acting as ~の3つの動名詞句である。目的語の2つ目までという下線部の引かれ方は tricky であるが, directing ~を分詞構文のように訳さないようにすることに注意したい。稀ではあるがこのような下線の引き方をする大学が存在するため注意を促しておく。

A includes B. の形は直訳しにくい, 「AにはBが含まれる」というように受動態の形をイメージして訳すなど工夫すればよい。

- ①本問題はやや難しい。まず, “They” とは直前の英文の主語 “people” を指していると考え。補語が “wrong” であることからすれば “sugars” や “decorations on proteins” などではない。本設問では「意味を明確にし」と問われているため, 単なる「人々」ではなく「糖を蛋白質の飾り程度にしか重要視しなかった人々」などと説明する必要がある。

could not have been more wrong は「それ以上に誤っていたことなどありえなかったのに」→「これほど誤っていたことはなかった(完全に誤りだった)」となることには慣れておく必要がある。

cf. I couldn't agree more. (これ以上の同意はありえません。)《直訳》

→ (完全に同意します。)

- ②were の主語が sugars であることがわかれば難しい英文ではない。

○ missing 「欠けている; 存在しない」

○ cell-surface protein 「細胞表面蛋白質」

細胞膜は基本的に脂質から成るが, 糖タンパクも存在し, それが免疫反応や神経伝達におけるレセプターとして機能するなど様々な重要な役割を果たしている。

○ be to blame for A 「Aに対して責任がある; 責めを負う」

- ⑤it will の後に省略されているのは直前の英文の, “have an equally dramatic effect on biology” である

○ a bumpy one (= road) 「でこぼこ道」は文脈に応じて意識する必要がある。

- (2) ⑥形容詞 etc. + as [though] + S + V, ... = Though + S + V + 形容詞 etc., ...
であるのはもはや常識であろう。

Ex. Rich as he is, he is not happy. = Though he is rich, he is not happy.

- ⑦“if + A” の成句については, if と A とに分解してみるとよい。単純に考えれば, if には「もし~ならば」と「たとえ~でも」2通りの訳し方があるのでこれを A と組み合わせてみればよい。

a if necessary 「もし必要なら (たとえ必要でも)」

c if ever 「もしあるとすれば; 仮にあったとしても」

d if any 「もしあるなら; たとえあるにせよ」

ただし, このような挿入句では「たとえ~でも」という意味で使われる頻度が高

い。また、if anything は「もしあるとしても」の他に「どちらかと言えば」という意味があるため、あらかじめ暗記しておく必要がある。

- ⑥ { 命令文, and … 「～しなさい, そうすれば…」
命令文, or … 「～しなさい, さもないと…」

本文章では、「計算してみれば, …」という意味にすべきであるから and が答えとなる。

- ⑦ 「never ~ without …ing: ~すれば必ず…する」の形。

⑧のあとに S V という節が存在しないことから考えて a の when (when S V となる) や b の the time (the time (when) S V となる) は不相当であろう。d the を入れると直前の by が前置詞句を作り得るが、意味が通らなくなる。

- (3) いずれも内容をつかみながら読んでいけば易しい。

- ① この段落は、糖類とはコーヒーを甘くするために用いる単純な物質ではなく、多糖類という巨大分子を形成し、大きさでも複雑さでも DNA にも肩を並べる重要な物質である、という趣旨が述べられている。とすれば、最近まで生物学者がエネルギー貯蔵など細胞表面の飾りとしてしか考えていなかった“them”とは「糖類」とりわけ「多糖類」のことを指すのは明らか。

- ② この段落は、前段落の、「ヒトゲノムプロジェクトが完了した今、糖類はグライコシル化に関与する酵素ないしその遺伝子を介して重要性を獲得する」という内容を受けて、「こうしたすべてによって、糖類や糖類の位置付けに対する科学者の見方は大いに変わった」という内容で始まる。そしてこの文を受けて、「“それら”なくしてはやっていけないと思う」と言わしめる「それら」とは何か。ずばり、「糖類」であろう。

- (4) 本問のような和問英答および英問英答問題では、出題文の表現を利用して答えればよい形式のものと、まったく一から自作しなければならない形式があるが、医学部入試一般に少なからず出題されるのは前者である。本問でも、該当箇所を見つけて、出題英文を利用すればよい。

- ① “glycome” が説明されているのは第 5 段落である。“glycome”の説明の前に“genome”と“proteome”の説明があり、それぞれ“its entire set of genes”と“its (entire) set of proteins”と書かれている。“glycome”も同様であり“encompasses all the sugars it makes”と述べられている。ここで、最も簡単な答えは、“It’s all the sugars it makes.”となろうが、“it”の内容を明確にしなければならないし、また“genome”などの説明と比較して“an entire set of”という表現を補った方がさらに正確な表現となる。

なお、出題英文中にも述べられているが、“-ome”とは「総体」の意味を表し、ヒトゲノム“genome”が解析された今後の課題(=ポストゲノム問題)として、RNA(中でも mRNA)の総体であるトランスクリプトーム(“transcriptome”)や、蛋白質の総体であるプロテオーム(“proteome”)と並んで、グライコム(“glycome”)が脚光を浴びている。

- ② “glycosylation”が説明されているのは第 12 段落である。ℓ. 73 “which is usually

called glycosylation”の先行詞である“this process”を説明すればよい。そして、その前の英文で、glycosylationを行う酵素である“glycosyl transferase”が“adds sugars to fats and proteins”という作用を行う酵素であることが書かれている。とすれば“this process”とは“add sugars to fats and proteins”を行う過程のことであるとわかる。

- (5) 大変基礎的な出題であるが、入試が迫ったこの時期には、難解な表現や単語を覚えること以上に、こういった基本的事項を確認することも重要であろう。というのは、入試は難しい問題を解くことよりも、皆が解ける問題を落とさないことの方が重要であるからである。逆に言うと、本問のような設問を落とさないように最終確認をしたいものである。
- ⑨ which sugars are biologically relevant が名詞節を作っており、whichは疑問形容詞。
- ⑩ that sugars often attach to proteins and lipids … が have known の目的語となる名詞節を作っており、thatは接続詞。
- ⑪ that は、直前の the enzymes を先行詞とし、(our bodies) use の目的語として働く目的格の関係代名詞。
- ⑫ that は、直前の vital roles を先行詞とし、(sugars) play の目的語として働く目的格の関係代名詞。
- ⑬ which は、直前の前置詞 in とともに、いわゆる「前置詞＋関係代名詞」の形を作る目的格の関係代名詞。先行詞は unborn mice である。
- (6) “as”の用法は受験生の悩みの種の1つ。厳密に区別できない場合も多いとされるが、一応の区別基準は学んでおく必要がある。

a 前置詞：「～の時」

「少女の頃、彼女はたくさんの絵を描いた。」

b 副詞（同等比較）：「同じくらい」

「トムは走るのがとても速い。でも僕も同じくらい速く走れると思う。」

c 接続詞：「比例（…するにつれて）」

「暗くなるにつれて寒くなった。」

d 接続詞：「譲歩（…だけれども）」

「彼は金持ちだけれども、幸せではない。」

e 接続詞：「直前の名詞を限定（～ような；～時の）」

「その本に書かれているようなハッピーエンドは好きではない。」

- ⑭ この英文中の as は難しい。一見すると、主節を先行詞とする非制限用法の関係代名詞 as のように思われる。

Ex. That would be impossible, as I've already explained.

※ as は主節を先行詞とする関係代名詞。

しかしながら、この英文での unfold は他動詞「～を明らかにする」ではなく自動詞「(物語などが) 展開する」という意味として捉えるべきと思われる。そうすると、as を接続詞で「比例」の意味と考えて、「遺伝学の最近の進歩が展開するにつれて、糖類の重要性がより一層明らかになってきた」と解した方が意味的にも妥当になる。

もっとも、この as が関係代名詞ではないと厳密に言い切ることはできないため、設問の妥当性には疑問を呈しておく（もちろん関係代名詞の as の選択肢がないため答えは c にならざるを得ない）。

- ④こちらの as は易しい。exciting が主語になり得ない以上、この文の主語は “new chemical techniques for ~” であり、いわゆる C V S の倒置形となっていることがわかる。とすればこの as は同等比較の副詞と考えるの妥当である。ちなみに比較の相手が省略されているが、その相手とは前の段落で書かれている内容である。

- (7) カギとなるのは after と which の解釈である。which は疑問詞ではなく関係代名詞である。そしてこの関係代名詞は前の after と結びついて after which（前置詞＋関係代名詞）となるのではなく、単独で主格の関係代名詞として先行詞 the sugar を修飾する。つまり after は「～を狙って；求めて」という意味の前置詞であり、その目的語は the sugar（というより the sugar と they were の間に省略されていると解される目的格の関係代名詞）である。

Ex. He is after a better job these days. (このところ彼は今よりも良い仕事を探している。)

つまり、下線部㊦には、

the sugar (which) they were after と、
the sugar, which was then injected into mice の、
2つの関係代名詞節が含まれることになる。

以上に気が付けば after と which の間にカンマをつけるべきであることがわかる。

- (8) 設問は、糖研究の「展開」を問う。そこで、基本的には、糖に関するいかなる研究が行われてきたかということを、時系列にしたがって述べていけばよい。ただし、1つひとつの研究をただ列挙すればよいというのではない（それでは 300 字では到底収まらない）。糖研究のブレイクスルーとなった研究や、それによって画期的な進歩が見込めるような重要な進歩をしっかりと書くべきである。そしてその際には、これまでこういうことがわかった、という過去の事実のみならず、どういう将来像を意図してこれまでの研究が展開してきたのかを、明らかにしてほしい。

そこで、本英文を簡単にまとめてみると、「近年まで重要視されていなかった糖類が、糖転移酵素遺伝子の発見をきっかけにあらゆる生物分野における重要性を獲得した」という前半の大きな流れと、「これら糖研究は技術の進歩にも助けられている」という後半の流れに大別できる。そこでこの流れを崩さずに、さらに具体的記述を加えて、字数内に収まる答案を作成すればよい。

冒頭に述べられているように、これまでの生命医学は、DNA → RNA → 蛋白質という、いわゆる「セントラルドグマ」のみに焦点を当て、糖や脂質を補助的物質にしか考えていなかった。しかし、ヒトゲノムが解析された現在、やるべき課題は RNA と蛋白質の機能の解明だけではないことがわかってきた。糖転移酵素遺伝子の発見は、セントラルドグマにおける蛋白質と同等、もしくは下層に存在すると考えられる、糖という物質の重要性を明らかにしたのである。つまり、糖類は一見セントラルドグマに含まれないように見えるけれども、糖転移酵素の遺伝子 DNA は糖転移酵素を作り出し、